

# 地域の拠点への誘因の仕掛けと新潟県内の『道の駅』の現状

長岡大学教授 山川 智子

## 1. はじめに～今、なぜ「道の駅」なのか？新潟県における「道の駅」の現状

本稿は新潟県内の「道の駅」の特色と魅力を把握し、地域資源としての可能性や今後の流れを読むことを目的とした。2019年7月から2020年3月にかけて、長岡大学地域志向研究に採択されたことを受けて、実際に新潟県内各地にある「道の駅」を巡り、現況の明確化に努めた。2020年2月26日に、長岡大学にて発表も行った。

新潟県内にある「道の駅」が抱える一般的な問題は（施設によっては異なるが）施設の老朽化（特にトイレ）が目立つことと、新たなバイパスの増設・高速道路のスマートETCの新規設置など従来の道路交通環境の変化に伴って、利用者が著しく減少する場所とそうでもない場所の二極化が実に著しく進んでいることである。

新潟県内の「道の駅」



(新潟県内の「道の駅」一覧：新潟県ホームページより引用)

新潟県の「道の駅」第1号は「道の駅 豊栄」で1993年に登録された。同時期に「道の駅 加治川」、「道の駅 神林」、「道の駅 朝日」、「道の駅 新潟ふるさと村」、「道の駅 能生」、「道の駅 みかわ」「道の駅 関川」がある。1994年以降、順次登録が進んで、2003年の「道の駅 越後川口」「道の駅 よしかわ杜氏の郷」までに33カ所を数えた。2008年以降も「道の駅 うみてらす名立」、「道の駅 南魚沼」「道の駅 パティオにいがた」、「道の駅 みつまた」、「道の駅 燕三条地場産センター」、「道の駅 庭園の郷 保内」と続く。



写真01 (左)「道の駅 みかわ」外観と写真02 (右)「道の駅 豊栄」案内板  
いずれも1990年代に設立された、新潟県内でも歴史がある「道の駅」である。  
(2020年02月撮影)



写真03 (左)「道の駅」閉鎖の案内板と写真04 (右)「道の駅 あいぼーと佐渡」外観  
「道の駅 芸能とトキの里」は2019年に完全閉鎖され、両津港を臨む「道の駅 あいぼーと佐渡」へ移転した。(2019年07月撮影)

2020年3月末の段階で、休止中や移転検討中の施設も含むと、新潟県内にある「道の駅」は39カ所となった。さらに2020年の秋には、「道の駅 ながおか花火館」と「道の駅 たがみ」の2つの新しい「道の駅」も無事にオープンした。かねてより移転問題がささやかれていた「道の駅 あいぼーと佐渡」もついに本格的に始動した。新型コロナウイルス感染症拡大で緊急事態宣言も出た2020年において「道の駅」は着実に増えた。2021年3月現在、新潟県内の「道の駅」は41カ所である。



写真 05 (左)「道の駅 たがみ」建設予定地と写真 06 (右)「道の駅 たがみ」外観

左の写真 05 は 2020 年 3 月に、田上町役場から建設予定地を撮影したもので、まだ建屋はできていなかった。右の写真 06 は 2021 年 2 月に撮影したもので、この建物の奥に田上町役場がある。「道の駅 たがみ」は 2020 年 10 月 28 日にオープンした。



写真 07 (左)「道の駅 ながおか花火館」外観と写真 08 (右) 開発過程を示すパネル

左の写真 07 は 2021 年 2 月に撮影したものである。館内には長岡花火ミュージアムや長岡の地場産品販売所、多種多様なフードコートやレストランなどがある。2020 年 9 月 18 日にオープンした。「1 年を通して長岡花火が楽しめる道の駅」がコンセプトで、長岡の魅力を伝える仕掛けがさまざまなところで見受けられる。

しかし、冒頭でも述べたように、新規に増設される「道の駅」がある一方、開設から年数を経て、施設の老朽化や、利用者の減少に伸び悩む「道の駅」もある。

全国で 1,180 カ所以上ある「道の駅」は地域を牽引する拠点である。国や地域の支援を受けながらも、地域の人たちの生活やニーズに応じて進化することが、これからの「道の駅」に求められている。本稿では「重点道の駅」や「重点道の駅候補」などの制度や、新潟県内の目ぼしい「道の駅」の取り組みを紹介してゆきたい。

「道の駅」と似た存在に「まちの駅」がある。詳細は当大学の鯉江ゼミナールの地域活性化活動

報告書があるので割愛するが、「まちの駅」のような「道の駅」というのが、将来の「道の駅」のひとつのロールモデルになり得ると推察する。

2020年2～3月にかけての現地調査で興味深かったのは、活気に満ちた「道の駅」の多くは「まちの駅」を思わせる雰囲気だったことだ。実際に「道の駅」と「まちの駅」の両方を兼ねる施設も、新潟県内では4カ所ある。①「道の駅 越後川口あぐりの里」(長岡市)、②「道の駅 良寛の里わしま」(長岡市)、③「道の駅 パティオにいがた」(見附市)、④「道の駅 よしかわ杜氏の郷」(上越市)である。



写真09 (左)「道の駅 越後川口」内部と写真10 (右)「道の駅 わしま」地域マップ  
いずれも長岡市内の「道の駅」であり、「まちの駅」でもある。写真05の奥は、フリースペースとして憩いの場となっている。(2020年02月撮影)

「道の駅」と「まちの駅」は、来訪者にトイレ・休憩場所を提供し、観光案内等さまざまな情報を発信するという点は共通である。しかし、そもそも「まちの駅」と「道の駅」とでは、主な対象が異なる。不特定多数の車両による利用者の収容を想定する「道の駅」の参入障壁はかなり高い。

「道の駅」は原則として、二輪車・自動車運転者のための休憩施設である。従って多くの「道の駅」が国道・県道の幹線道路沿いに位置する。申請時の手続きや設置基準の審査が煩雑である「道の駅」に比べると、「まちの駅」はそれぞれの店舗や施設の利点をそのまま活かしつつ、独自の魅力を発揮できる。

加えて「まちの駅」は、周辺地域の人たちが主な対象であるために、そのニーズに即した展開をしやすいのが強みである。一般的な利用者、すなわち、一見さんの利用客も受け入れながら、地域に目を向ける「道の駅」が生彩を放つ。

図らずも2020年は新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、各地で行動自粛を余儀なくされた。不特定多数の地域外からの来訪者を避ける傾向は、新潟県内でもさまざまな場所で見受けられた。

## 2. 全国の「重点道の駅」と「重点道の駅候補」事例

全国各地の「道の駅」を地域活性化の拠点とする取り組みを後押しするために、国土交通省は平成26年度に「重点道の駅」制度を創設した。既存の「道の駅」を対象に、特に優れた機能を継続的に発揮していると認められる施設を地域活性化の拠点として、以下の全国モデル「道の駅」6駅が選定された。

<p>① 道の駅「遠野風の丘」(岩手県遠野市)</p> <p>【広域防災拠点】 東日本大震災で、復旧・救援に向かう自衛隊・消防隊やボランティアの後方支援拠点として高度な防災機能を分担した。</p> <p>【産業振興の拠点】 沿岸被災地の海産物を販売する鮮魚店を開設し、被災地の復興を支援</p> <p>【観光や地方移住等 総合案内拠点】 観光案内所で、沿岸地域の観光復興の情報を発信。ふるさと納税制度の紹介、納税者には、「道の駅」の特産品を提供。</p>	<p>② 道の駅「もてぎ」(栃木県茂木町)</p> <p>【真岡鉄道のSLやサーキット等地域の魅力にアクセスするゲートウェイ機能】 6次産業化「道の駅」が農家から柚子等を全量買取、手作業で加工、オリジナル商品(33種類)を開発、販売している。</p> <p>【地域のにぎわいと防災の拠点】 創意工夫により、利用客数、販売額は10年間で1.3倍に増加した。防災力向上のための防災館を併設。平時からの防災啓発を行う。道の駅の商品をふるさと納税のお礼として地域PRに活用。</p>
<p>③ 道の駅「川場田園プラザ」(群馬県川場村)</p> <p>【「農業プラス観光」人口約3,700人の村に年間約120万人が来訪。リピート率は7割】 農業プラス観光の推進。朝取り野菜・ブルーベリーや乳製品の地域資源を活かし、果物狩りや陶芸の体験やイベントにより、村民と来訪者の交流の機会を提供した。</p> <p>【地域のゲートウェイ】 観光協会スタッフがビジターセンターに常駐し、宿泊・体験施設中心に地域全体を観光案内。</p>	<p>④ 道の駅「とみうら」(千葉県南房総市)</p> <p>【観光資源(びわ等)をパッケージ化し、都市部の旅行代理店へ販売】 「道の駅」を核とした6次産業化「道の駅」が中心となり特産のビワを加工、オリジナル商品(50種類)を開発、販売した。</p> <p>【地域固有の観光資源をパッケージ化】 「道の駅」が旅行業資格を取得して観光資源をパッケージ化し、都市部の旅行会社へ販売した。富浦人形劇など、地域の伝統・文化の継承の場としても活用。</p>
<p>⑤ 道の駅「萩しーまーと」(山口県萩市)</p> <p>【地元業者と魚の加工品の開発。商品は「究極のおみやげ」等を受賞】 萩漁港の水揚げ高の約15%を販売し、地産地消に寄与魚食普及・食育の拠点として地域活動を実施した。生み出したヒット商品は地域全体の活性化に貢献した。</p>	<p>⑥ 道の駅「内子フレッシュパークからり」(愛媛県内子町)</p> <p>【地元農家を中心とする商品開発、町内の農産品販売額の15%】 季節の農作物の加工商品を開発販売。内子町内の農産物販売額の約15%を売り上げた。IT導入による安全安心な農産物提供システムを構築。鮮度向上を追求した。</p>

全国モデル「道の駅」選定の基準は、①設置からおおむね10年以上、②継続的に地域に貢献観光・産業・福祉・防災等、地域資源の活用や地域の課題解決を図るための地域のゲートウェイや地域センターとして機能していることが挙げられる。

上記6つの「道の駅」は全国的な成功例である。地域活性化の拠点として、特に優れた機能を継続的に発揮している「道の駅」を全国的なモデルとして成果を広く周知し、さらなる機能発揮を重点支援する試みである。とりわけ「道の駅もてぎ」(栃木県)や「道の駅川場田園プラザ」(群馬県)は6次産業化のモデルとして参考にされることも多い。いずれも地域にあるもの(名産品・景観・

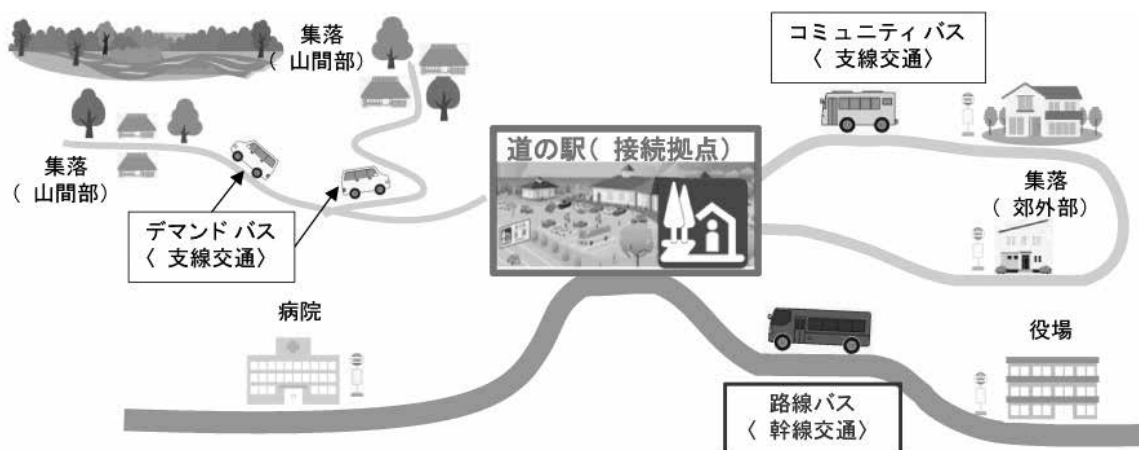
人的資源)をうまく組み合わせた相乗効果で、売り上げや来場者数などの成果を出している。

「道の駅」が有する個々の「機能」が異なる点を踏まえ、模範性を高めるために、平成28年度と平成29年度には、特定のテーマについて「道の駅」の質的向上に資する全国の模範となる取り組みや成果が認められる「道の駅」が選定された。全国の「道の駅」からの視察及び講師の要請に対応する役割が期待されている。

平成28年度は住民サービス部門モデルに以下の6つの「道の駅」が選定された。

<p>① 道の駅「両神温泉薬師の湯」(埼玉県小鹿野町) 「道の駅」を地域福祉の拠点に位置付け高齢者が集う生きがいづくり・交流の場を形成。直売所での買い物や出品、温泉施設やデイサービスセンターの利用。バスターミナルを整備し、集落から「道の駅」への高齢者の移動手段を確保した。</p>	<p>② 道の駅「桜の郷荘川」(岐阜県高山市) 「道の駅」が温泉施設への無料送迎、屋内運動場でのスポーツフェスティバル等、地域住民の健康増進の取り組みを実施して住民の憩いの場、交流の場として機能する。「道の駅」が地区のまちづくり協議会へ積極的に参画・連携した。</p>
<p>③ 道の駅「美山ふれあい広場」(京都府南丹市) 住民自治組織を軸に、診療所、保健福祉センター、高齢者コミュニティセンターの福祉サービス等の施設を集積し、総合的な拠点を形成した。住民票や証明書の交付の行政サービスを実施。</p>	<p>④ 道の駅「鯉が窪」(岡山県新見市) 多様な機能を集約したワンストップサービス、高齢者福祉サービスの提供を計画から運営まで住民主体を掲げ「小さな拠点」を形成した。デマンドバス等の運行、宅配・安否確認サービスも実施。</p>
<p>⑤ 道の駅「小豆島オリーブ公園」(香川県小豆島町) 町が「道の駅」を福祉施策の中核として位置付け、介護予防や健康増進、健康に関する講演会等、地域住民の健康増進に資する取り組みを実施。オリーブ販売等による「道の駅」の収益を福祉関連施設の運営に還元した。</p>	<p>⑥ 道の駅「酒谷」(宮崎県日南市) 「道の駅」の収益を自治組織に還元し「小さな自治」を形成。郷土料理、特産品加工の体験学習、そば打ち体験等の生涯・体験学習で地域住民の交流の場を創出した。高齢者の見守り活動も兼ねた地域福祉サービスの提供として、弁当宅配、農作物の集荷代行等も行う。</p>

平成28年度の住民サービス部門の「道の駅」は、①高齢化社会に対応した地域福祉向上、②地域課題に対応した住民生活支援、③地域の小さな拠点形成を目指した取り組みなど、公共の福祉増進を目的とした地域住民へのサービス向上に資する取組を実施して一定の成果を上げている施設が選ばれた。平成29年度は地域交通拠点部門モデルとして7つの「道の駅」がそれぞれ選定された。(以下は対象となった「道の駅」の交通アクセスのイメージ図、「道の駅」公式サイトより引用)



中山間地域や周辺では「道の駅」が公共交通モード間の接続拠点となっており、バス亭の上屋・ベンチの設置、待合スペース・連絡通路の確保の他にダイヤ調整、公共交通中心の空間配置など、接続機能向上の取組によって地域住民の生活の足の確保に資する成果をあげているものが対象となった。

<p>① <u>道の駅「あしよろ銀河ホール21」(北海道足寄町)</u> バス車両のロータリーと一般車両の駐車場が完全分離し、公共交通利用に配慮した空間設計。</p>	<p>② <u>道の駅「上品の郷」(宮城県石巻市)</u> 市の総合交通戦略で交通拠点となる。仮設住宅ルートも追加し、被災者を支援。民間バス事業者と連携して利便性向上。</p>
<p>③ <u>道の駅「輪島」(石川県輪島市)</u> 将来の無人自動走行も見据えた電動カートの試験走行を実施。隣接の文化会館との渡り廊下も整備した。</p>	<p>④ <u>道の駅「吉野路黒滝」(奈良県黒滝村)</u> コミュニティバスから路線バスへ乗り継ぐ際、村が路線バスの往復乗車券を補助。バスの乗り継ぎを時間調整で担保。</p>
<p>⑤ <u>道の駅「舞ロー IC 千代田」(広島県北広島町)</u> 公共交通利用に配慮した施設設計。民間バス事業者と連携 IC チャージ機の設置で乗継利便性が向上。</p>	<p>⑥ <u>道の駅「虹の森公園まつの」(愛媛県松野町)</u> 利便性向上のため、路線バスとコミュニティバスが連携して、乗り継ぎダイヤを調整。</p>
<p>⑦ <u>道の駅「むなかた」(福岡県宗像市)</u> 民間バス事業者と連携し、路線バスを「道の駅」経由に変更。平成26年より、天神行きの特急バス路線を新設。</p>	

このような「道の駅」は地場産業の振興や住民の生活の充実、交通の利便性向上などから、地域活性化の拠点としての役割を担っている。しかし、これらの極めて成功したモデルケース以外にも、優れた企画や効果的な取り組みが今後期待できる「道の駅」はある。「重点道の駅」は取り組みの先駆性、効果、実現可能性に基づき、優れた企画を選定するもので、「道の駅」整備の企画段階でも対象となる。

「重点道の駅」制度は、創設された平成26年度に35駅、平成27年度に38駅が選定された。平成28年度と平成29年度は前述の特定テーマの厳選された駅のため選定はなかったが、平成30年度と令和元年度は各15駅と着実に数を増やしている。

「重点道の駅」の選定は国土交通省大臣によるが、「重点道の駅候補」は地域活性化の拠点となる企画の具体化に向けて地域で意欲的な取組が期待できる「道の駅」の整備企画を対象に、地方整備局が選定を行う。平成26年度には全国で49箇所が、平成30年度には14箇所が、令和元年度には15箇所が選定された。

国土交通省管轄の「重点道の駅」では、今後の施設整備に向けて、駐車場や休憩施設等は社会資本整備総合交付金等で重点支援される。自治体・関係機関による協議会を設けて、複数の関係機関の制度の活用等についてワンストップで相談できる体制を構築するなど、ハード・ソフト両面からの支援が充実している。これに対し地方整備局管轄の「重点道の駅候補」は、自治体・関係機関による協議会を設けて複数の関係機関の制度の活用等についてワンストップで相談できる体制を構築する点は「重点道の駅」と共通するが、主にソフト面からの支援に限定されている。

有識者等の意見を踏まえた選定は、通例年1回行われる。応募があった施設について「重点道の駅」もしくは「重点道の駅候補」の振り分けがなされるようである。一口に地域を活性化する具体的な取り組みと言っても、それぞれの地域特性や規模などに応じて、下記のような種類が挙げられる。「道の駅」相互のネットワーク化によって効果を発揮する「道の駅」というのも挙げられるかも知れない。

①産業振興	地域の特産品を活かした産業振興「道の駅」
②地域福祉	地域の高齢化等に対応した住民サービス（地域福祉）を提供する「道の駅」
③交通結節点	公共交通の結節点として地域住民に交通サービスを提供する「道の駅」
④防災	災害時に高度な防災機能を発揮する「道の駅」
⑤観光総合窓口	地域の観光総合窓口となる「道の駅」
⑥インバウンド観光	外国人観光客（インバウンド）観光を促進する「道の駅」
⑦地方移住等促進	地方移住・ふるさと納税推進に貢献する「道の駅」
⑧交流・連携	地域間の交流・連携を促進する「道の駅」

新潟県内でも、平成26年度以降、複数の「重点道の駅」と「重点道の駅候補」が選定されてきた。それぞれの「道の駅」の特性や「重点道の駅」もしくは「重点道の駅候補」としてのありかたを以降にまとめた。

### 3. 【重点道の駅「瀬替えの郷せんだ」】（新潟県十日町市）平成26年度選定



（公式サイトより引用）

「道の駅 瀬替えの郷せんだ」は、国道252号沿いにある。柏崎市と十日町市のそれぞれの中心部とは距離にして10キロ以上離れていて、車でも20～30分かかる。

周辺には廃業した温泉地（月湯女温泉）・スーパー（Aコープ仙田店）があるのだが、簡易郵便局や個人商店以外に目ぼしい施設は見当たらない。国道252号自体が物流輸送の拠点と言うより生活道路で、夜などは街灯もほとんどなく閑散としている。

寂れた印象の限界集落に近い様相を呈していた限界だったが、平成24年に仙田体験交流館がリニューアルして売店「あいマート」を開店したことで、産地直送品・日用品を販売する場ができた。各地の「道の駅」でも新鮮な野菜・果物が主要商品として販売されることは多いが、「道の駅 瀬替えの郷せんだ」が主な対象にしているのは周辺地域の住民である。「あいマート」はコンビニエンスストアを思わせる雰囲気、規模はさほど大きくはない。しかし、日用品・買い回り品を購入する場が近くにできたことで、高齢者が買い物難民となるのを防ぐ役割を果たしている。





写真11 (左)「道の駅 瀬替えの郷せんだ」正面玄関と写真12 (右) 同施設・館内にある食事処の様子 (2020年2月撮影)

それだけでなく、地域の人たちが作成した手芸品などが土産物として店頭で並んでいる。規模としては確かに小さなものだが、手づくりの「ここでしか買えない」商品である。買い物をするだけでなく、自らが作ったものが商品として売られる。ほどほどに無理のない範囲で、これからも継続して欲しい営みである。



写真13 (左)・写真14 (中央)・写真15 (右) は、「道の駅 瀬替えの郷せんだ」館内「あいまーと」の様子。日用品や買い回り品が揃っている。(2020年2月撮影)



写真16 (左)・写真17 (右) は「あいまーと」で販売されていた手工芸品である。写真16のストラップの商品は100歳の方が作ったものと紹介されている。

仙田交流館に隣接する「せんだ元気ハウス」は、夏は農業実習生を受け入れる拠点として、冬は高齢者の共同生活の場として過疎・高齢化が進む豪雪地帯での除雪ボランティア担い手確保と移住窓口・生活支援を同時に担っている。過疎化が進み、豪雪対策が必要な中山間地の「道の駅」としては、先駆的なモデルケースとなろう。

「道の駅 瀬替えの郷せんだ」は、周辺の住民の生活向上に寄与しているだけでなく、地域で採れた米を「仙田米」として地域ブランド化を図っている。『仙田農民の意地と執念の結晶をぜひ、ご賞味ください。平場地区の大量生産される米とは違った、大地の香りに溢れる逸品です。』というキャッチコピーから感じられるのは、地域に根ざした農業への誇りと商品への並々ならぬこだわりでもある。必要以上に手を広げず、着実に地域の住民のニーズに応える姿勢こそが最大の魅力である。

#### 4. 【重点道の駅「あらい」】(新潟県妙高市) 平成26年度選定 【重点道の駅候補「あらい」】(新潟県妙高市) 平成30年度選定



(公式サイトから引用)

「道の駅 あらい」は国道18号線沿いにある、上信越道のインターチェンジにも連結している。一般道と高速道路の接点であるだけでなく、サービスエリアとして大駐車場・観光案内・飲食店を中心とする複数の店舗・コンビニエンスストア・宿泊施設と「道の駅」エリア内で揃っていて、新潟県内でも有数の規模を誇る。



写真18(左)「道の駅 あらい」の「くびき野情報館」外観と写真19(右)同・館内休憩スペースが広く、情報サービスも充実している。(2020年2月撮影)

「道の駅 新潟ふるさと村」も交通の要所・幹線道路沿いで規模としては大きいですが、ショッピングモールや宿泊施設は、あくまでも「道の駅」周辺に存在している。「道の駅 あらい」は豪雪地帯において、環境・観光にも配慮した新たな防災拠点としての役割を期待されている。降積雪期に大規模災害が発生した時に、駐車場の一部を立体化することで、臨時避難場所や物資保管場所として利用できるという。

近隣のメガソーラー発電所と接続することで、EV車を電源車として災害時に活用し、電力供給を図るなど、防災拠点になり得る設備を擁している。国道18号線と国道8号線が接続する上越市の市街地付近は構造的に渋滞が起りやすい。「道の駅 あらい」から高速道路を利用することで、長野方面から新潟・富山方面への移動が比較的円滑になった。北陸新幹線の開通に伴い、上越妙高駅や糸魚川駅周辺の道路は新規に整備されたが「道の駅 あらい」周辺地域は従来の状態が多い。



写真20 (左)「道の駅 あらい」におけるEVステーション。写真21 (右)は同館内に展示されたライチョウの標本。(2020年2月撮影)

平成26年度に「重点道の駅」に選定されただけでなく、平成30年度には新たに【DMO (= Destination Management/Marketing Organization: 観光地域づくり法人)による道の駅を拠点とした地域づくり～インバウンド誘客の推進～】として「重点道の駅候補」にも選定された。DMO (観光地域づくり法人)は、地域の多様な関係者を巻き込みつつ、科学的アプローチを取り入れた観光地域づくりの舵取りを担う法人である。いわば観光地域づくりの司令塔となる存在で、観光庁による登録制度が取られている。DMO (観光地域づくり法人)に登録されると、観光庁や内閣府などの関係省庁からの支援を受けやすくなる。新潟県では「道の駅 あらい」の他にも、「道の駅 南魚沼」も「重点道の駅候補」の選定でDMO (観光地域づくり法人)の意義を打ち出している。インバウンド (外国人旅行者)がどの程度あるのか詳しくわからないが「道の駅 あらい」の施設の多くが飲食店で、コンビニエンスストア・ビジネスホテルといった形態であることから、キャッシュレス決済対応や多言語対応、公衆トイレの洋式便器の整備は比較的進んでいると思われる。周辺に日本百名山の妙高山と火打山があり、赤倉温泉や春日山城跡など観光の名所にも近い。

もし「道の駅 あらい」に日帰り温泉等の温浴施設があれば、利用者の滞在時間はもう少し増えるかも知れないが、現時点でも交通・防災・観光の拠点として地の利を活かした優位を持つ。平成25年度に行われた「行って良かった道の駅50選」に「道の駅 新潟ふるさと村」、「道の駅 能生」、「道の駅 うみてらす名立」と並び選出されている。交通アクセスの利便性や「四季彩館ひなだん」で販売する地元の農産物、「日本海鮮魚センター」の海産物の豊富な品揃えも人気の一因のようだ。総合案内の「くびき野情報館」でも新潟県内や周辺地域の観光情報が入手しやすい。

## 5. 【重点道の駅候補「パティオにいがた」】(新潟県見附市) 平成27年度選定



写真22(左)「道の駅 パティオにいがた」館内と写真23(右)同施設・テラス席。家族連れが多く見受けられた。(2020年2月撮影)

「道の駅 パティオにいがた」の魅力に、車両での休憩や仮眠がしやすい安全な環境も挙げられる。駐車場が広く複数に分散しており、水回りやトイレも清潔に保たれ、周辺の街灯も整備されている。過ごしやすく快適な場所としてドライバーにも人気なようだ。広々とした公園には、子供連れの姿もよく見受けられる。

「道の駅 パティオにいがた」は地方創生拠点としての、いわばゲートウェイ型の施設である。「重点道の駅候補」として申請された資料を見ると、戊辰戦争の史跡や地域の魅力を発信することに力を入れている様子が伺える。館内には過去の災害と対策や効果をテーマとしたパネル、ジオラマが展示されている。「まちの駅」でもあり、見附市内にある他の公共施設との連携も緊密である。

観光総合窓口としての機能もさることながら「道の駅 パティオにいがた」の特筆すべき点は施設の利用しやすい点である。開駅から年数がさほど経過していない新しさも勿論あるが、トイレの共用スペースのデザインが秀逸である。全国的な表彰も受けているトイレはメンテナンスも行き届き、利用者が安全・安心して使えるスペースとなっている。今回巡った新潟県内の「道の駅」の中でも、トイレ回りの清潔さや使いやすさにおいて、後述の「道の駅 庭園の郷 保内」と並んで最も優れていた施設であった。

見附市は従来からコンパクトシティ化に力を入れており、「超高齢化社会・人口減少社会における持続可能な都市・地域」の地域活性化モデルケースに選ばれている。館内には健康(健幸)づくりを促すパネルも数多く展示され、レストランで提供する食材や直売所で販売される商品等も健康志向の高いものが目につく。

今町地区を中心に史実に光を当てた歴史資産の活用、市街を回遊する仕組みづくりは交流人口の増加を図っている。中之島大風合戦などイベント開催時だけでなく、まちなかにある「道の駅」として買い物・集会・飲食・まち歩きなど、さまざまな目的で老若男女問わず人が集まってコンスタントに賑わっている印象を受ける。



写真24(左)「道の駅 パティオにいがた」館内トイレの前に掲示されていた「日本トイレ大賞」受賞のパネル。確かに自慢したくなるくらいにきれいなトイレで、この状態をずっと維持して欲しいと切に願う。写真25(右)同施設・館内の合格祈願の掲示。受験シーズンというのもあつてか、験担ぎの縁起物がやたらと目についた。(2020年2月撮影)



写真26(左)「道の駅 パティオにいがた」駐車場と写真27(右)屋外に設置された健康ウォーキングコースの表示(2020年2月撮影) 駐車場はいくつか分散して設けられており、混雑時にも対応しやすい構造である。駐車スペースが比較的広く取られているのと、トイレ・水回りにも近いので、車中での休憩・仮眠には便利である。写真27のような健康ウォーキングコースの表示は他にもいくつか見受けられた。

## 6. 【重点道の駅候補「いりひろせ」】(新潟県魚沼市) 平成27年度選定



(公式サイトより引用)

魚沼市には「道の駅 いりひろせ」と「道の駅 ゆのたに」の2つの「道の駅」がある。福島県につながる国道252号線沿いの「道の駅 いりひろせ」は過疎・高齢化が進行する典型的な中山間地にあり、県内の他施設と比べても規模はさほど大きくはない。しかし、福島方面や長岡・栃尾、魚沼・小出方面へ通じる交通の要所で立地条件や地域的な状況は「道の駅 瀬変えの郷せんだ」とも共通項が多い。

「重点道の駅候補」として【小さな拠点を支える地域巡回サービス拠点】を示し、①過疎・中山間地の見回りと集荷・配達による地域福祉サービスの拠点、②福祉サービスの構築に関連した地域福祉と産業振興と、田舎暮らし体験など地域の魅力を発信し、観光振興や地域の担い手不足の解消を図るのが重点項目となっている。



写真28(左)「道の駅 いりひろせ」外観と写真29(右)入り口にある案内板。  
国道252号は隘路や冬季通行止めの区間が多く、地図情報は特に重要である。



写真 30 (左) 同施設・店内の様子と写真 31 (右) 地場産や地元の商店で扱っている商品について、それぞれにきめ細かな表示がなされている。

今回の調査では福祉サービスの巡回を行うところは見ることができなかったが、地域の情報発信という点では興味深い情景に遭遇した。

折しも天候不順で猛吹雪の日で、スキー場のロッジを思わせる館内には飲食や買い物をする一定数の利用客が見受けられた。物品の販売やサービスの提供だけでなく、利用客の問いかけ（周辺の食事処の有無や道路状況など）にスタッフがコンシェルジュのように親切丁寧に対応している様子が印象に残った。スマートフォンを使えば自分で検索できそうな案件も、電波状態が悪い山間地では必要な情報がすぐに入手できないこともある。周辺は峠道にあつて隘路が多い上に冬季閉鎖の箇所もある。リアルタイムの道案内や情報は利用者の安全と便宜を図る意義がある。地元の商店や生産者の商品の販売促進にもさりげない工夫が施されており、きめ細かな対応が実に印象的だった。

一方で気になったのが、同じ魚沼市にある「道の駅 ゆのたに」の存在である。「道の駅 いえひろせ」は市街地から離れているが、こちらは市街地における情報ステーションとしての位置づけである。しかし、周辺に大型の店舗が進出してきた影響か、従来あった販売所・レストラン等の営業が軒並み縮小し、閑散としている。

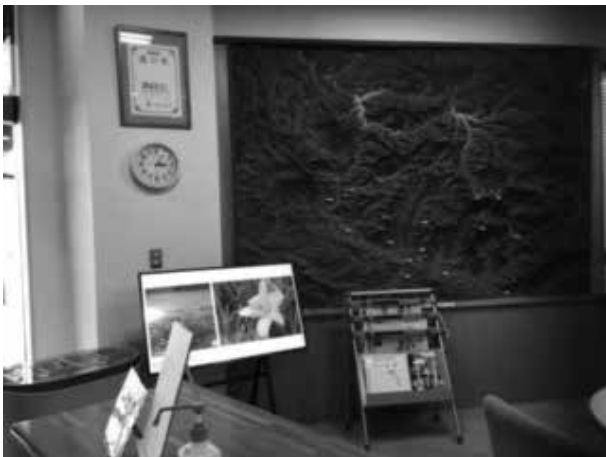


写真 32 (左)「道の駅 ゆのたに」情報ステーション館内と写真 33 (右)「道の駅 ゆのたに」外観。

## 7. 【重点道の駅候補「南魚沼」】(新潟県南魚沼市) 平成27年度選定



写真 32 (左)・写真 33 (右) はいずれも「道の駅 南魚沼」の「今泉博物館」館内に展示されていた雛人形。(2020年2月撮影)

「道の駅 南魚沼」は旅行業登録を行って、雪国観光圏地域の案内機能を備えた地域全体の周遊観光やインバウンド観光の推進に取り組んでいる。地域全体のゲートウェイ・地域創生拠点として、日本版 DMO を念頭に置いている。国道 17 号線沿いにおいて、高速道路のインターチェンジにも近く、交通・物流での利便性は高い。「今泉博物館」は「道の駅 南魚沼」の敷地内だが、周辺にランドマークとなる観光資源・観光施設が少なく、広域的な総合案内といった位置づけは適切といえる。

従来からこの地域は医療拠点となる病院・診療所など医療サービスの確保に苦勞してきた。「今泉博物館」に診療所が設置されたのは、地域の医療に貢献している。

日本版 DMO を軸に、産業振興の核として南魚沼産コシヒカリのブランド化を進め、地域の農産物の生産・流通の拡大、生産された食材を活かした食文化の浸透を図る試みに力を入れている。

「道の駅 南魚沼」は同じく雪国地域圏にある他の「道の駅」(例えば、湯沢町の「道の駅 みつまた」、十日町市の「道の駅 クロステン十日町」)との連携も当初想定していたようだが、実際のところ「道の駅 南魚沼」単体で地域拠点としての役割を果たしている。相互の「道の駅」間の距離が結構離れているのと、市町村の枠組みが異なるといった諸般の事情がありそうである。

「道の駅 南魚沼」の販売所では、南魚沼産コシヒカリだけでなく、地域で採れた農産物や加工食品、園芸品など多様な商品を扱っている。何分にも南魚沼産コシヒカリのブランドが圧倒的ではあるが、将来的にはここから新たな商品ブランドが生まれてくるかも知れない。



## 8. 【重点道の駅「能生」】(新潟県糸魚川市) 平成30年度選定



写真34(左)「道の駅 能生」の鮮魚センターと写真35(右)同・カニかに館外観。

写真36(下)同・カニかに館館内。鮮魚センターで購入したカニをその場で食べるための施設で、テーブル・椅子、水回り、ゴミ捨て場なども完備されている。



「道の駅 能生」は国道8号線沿いに位置し、海と山に挟まれた景観が印象的である。従来からカニなどの海産物の販売で有名だったが、最近では水産加工物の6次産業化の環境整備がとみに進展してきた。水産・海洋を学ぶ新潟県立海洋高等学校との地域・産学連携で魚醬「最後の一滴」他の加工品の製品化を推進している。これらの開発商品は、新潟県内のさまざまな売り場でも見受けられるようになった。商品の紹介が何とも絶妙で、思わず購買意欲をかき立てられる。

周辺の「道の駅 うみてらす名立」、「道の駅 親不知ピアパーク」も海岸と山地が近接した風光明媚な場所に位置しているが、「道の駅 能生」は景観の良さだけでなく多様な機能を有し、地域の核となる環境整備に力を入れることで、誘客・特産品販売促進による魅力向上と差別化を図っているように思われる。



写真37 (左上)・写真38 (右上)・写真39 (左下) は、いずれも「道の駅 能生」館内売り場で新潟海洋高校の産学連携開発の商品や案内など。写真40 (右下) は「道の駅 能生」内コンビニエンスストアの様子 (2020年2月撮影)



充電インフラ設備の拡充と整備や子育て支援設備の充実に力を入れる「道の駅」は近年増加傾向にある。「道の駅 能生」はそのような趨勢を踏まえながら、さらに次世代観光拠点の形成やサイクリング拠点化を推進している。近年のサイクルツーリズムの浸透もあって、自転車による利用者の「道の駅」に対する需要もある程度見込まれる。サイクリストに対して受入れ環境の拡充整備を行い、サイクルイベントツアーの実施やインバウンド向けの地域情報発信を強化することで、日本の風景の中でサイクリングを求める外国人客の増加に対応した。

地元の海洋高校とのコラボレーションや釣りポイント設置もそうだが、水産資源・加工業の強みを活かし、漁業協同組合と連携する6次産業化に重点を置いている。レストラン等で関連イベントも積極的に行っている。館内にコンビニエンスストアができたことで利便性も高まったと思われる。コンビニエンスストア併設の「道の駅」は新設の駅や従来からの駅によらず、比較的よく見受けられる。

## 9. 【重点道の駅「庭園の郷 保内」】(新潟県三条市) 令和元年度選定



(公式サイトより引用)

「道の駅 庭園の郷 保内」は国道403号線に近接して、加茂市との境界近くに位置する比較的新しい「道の駅」である。三条市には他にも「道の駅 漢学の里しただ」と「道の駅 燕三条地場産センター」のそれぞれ特徴的な2つの「道の駅」があるが、同市の「道の駅」同士の連携が緊密であるのも大きな特色と言える。

「道の駅 庭園の郷 保内」は、現在ある新潟県内「道の駅」でも群を抜いて、地域の特性を活かした子育て世代応援事業に取り組んでいる。「道の駅」の駅長が女性であるのを始めとして、館内には女性スタッフが多いように見受けられる。他の「道の駅」でも販売や案内で女性スタッフを配置しているケースは実際に多いが、授乳室やトイレ内のベビーチェア設置、子供を連れた利用者には配慮したスペースのなど、館内施設のデザインや利用者の動線も考慮した整備がなされている。

子育て世代の女性を中心に安心して子供と楽しく過ごせる場の提供を「道の駅」のコンセプトに掲げ、木や植物を活かした子供の遊び場の整備、緑を活かした子育てセミナーやワークショップの充実、親子で参加できるガーデンイベントの開催と、利用者にとって具体的に直接役立つ交流の場づくりを図っている。



写真41(左)・写真42(中央)・写真43(右)は、「道の駅 庭園の郷 保内」館内の様子。明るく居心地の良い空間である。写真41には利用者の飼い犬が写っているが、一般にペット立ち入り禁止の「道の駅」では珍しい光景といえる。(2020年2月撮影)

さらに興味深いのは、三条市保内に従来からあった地場産業の植木産業を存分に活かしている点である。保内地域は国内でも有数の植木の集積地で、植木の品質と卓越した造園技術は高い評価を得ている。植木・花き産業が盛んと言え、新潟市秋葉区にある「道の駅 花夢里」も同様で、平日でも地元の人と思われる利用者で賑わっている。しかし、「道の駅 花夢里」が周辺の農家・造園業者を主な対象としているのに対して、「道の駅 庭園の郷 保内」は優れた技術を活かした新たな事業展開の可能性を探っている。「道の駅 花夢里」は売り場の大半を苗木・種苗等の商品が占めている。食品を始めとする日用品の売り場や食堂もあるが規模は小さい。これに対して「道の駅 庭園の郷 保内」は、地元の商店や各地からの食品・加工品、日用品が豊富であり、一般的なスーパー等に比べると地産地消を意識した少しこだわりの感じられる品揃えである。地場産業を活かしたガーデニングに関連したコーナーを眺めながら、買い物を楽しめるデザインになっている。造園に関連する業者や地元の農家も当然この施設を利用しているだろうが、実際に「道の駅 庭園の郷 保内」に多く訪れるのは地域や周辺の一般的な人たちと思われる。



写真44 (左上) は「道の駅 花夢里」外観、写真45 (右上) は同・種苗売り場  
 写真46 (左下) は「道の駅 庭園の郷 保内」館内売り場、写真47 (右下) は同・中庭のオブジェ (2020年2月撮影)



このように植木・庭に対する新たな需要喚起による地元産業の振興を図るために庭園をテーマとした「道の駅」を創設し、植物や土と触れ合う場を提供しながら独自の子育て支援に取り組んでいる。季節ごとに花や収穫が楽しめるガーデンを整備して、親子で楽しめる地元産業を活かしたワークショップを充実させている。他に液体ミルクの販売や、新潟県内でも初めての紙おむつ・除菌シートの自動販売機の導入など、子育て中の親の心情やニーズに寄り添って、「道の駅 庭園の郷 保内」を来やすく居心地の良い場所にするために具体的な行動を続けている。地場産業を活かした

子育て支援は、今後の地域を担う世代に対し、花育や木育という形で庭や植物への関心や興味を持たせることで情操教育としての効果も期待される。地場産業とこれからの子育て支援をうまく組み合わせた先進的な取り組みと言える。

「道の駅 庭園の郷 保内」は子育て支援だけでなく、インバウンド観光の強化にも力を入れている。館内施設インフォメーションの多言語化や外国語対応職員の配置など、外国人向けの案内所機能を整備することで、地場製品のPR・販売のグローバルな展開の可能性が拓けた。従来は産業振興の展示場だった「道の駅 燕三条地場産センター」も同様に、地域を見据えながらもグローバルな展開を試みる動きが活発で連日盛況を呈している。地元の産業や名産品といったモノだけではなく、魅力となる技術・ワザをもっと知ってもらおうとする動きはますます進むだろう。

「道の駅 庭園の郷 保内」では、外国人観光客向けワークショップやイベントを実施するとともに、外国人観光客向けの植木産業を活かした新規商品の開発、販売植木関連商品の開発・販売に取り組もうとしている。「道の駅 庭園の郷 保内」は具体的な行動と迅速な対応、さらに情報発信の巧みさでも、新潟県内の「道の駅」の中で群を抜いている。例えば、周辺地域の造園業者たちを「グリーン・ギルド」として凄腕の技術集団として大々的にアピールしている。館内に展示された写真パネルの秀逸さは他に類を見ない。「道の駅 庭園の郷 保内」館内の施設、庭園のあらゆる場所に、技術とデザインへの強いこだわりが感じられる。館内トイレは清潔でメンテナンスが実によく行き届いている。ただ技術の巧みさを誇るだけでなく、訪れた人への配慮、居心地の良い空間づくりを、駅長やスタッフが徹底して行っているのが「道の駅 庭園の郷 保内」の最大の強みである。「ペットとの同伴」を解禁するなど画期的な試みも、すべては利用する人の目線に立った運営と思われる。



写真48 (左)・写真49 (右) は「道の駅 庭園の郷 保内」館内にある「グリーン・ギルド」紹介の写真パネル。迫力ある凄腕集団の勇姿が印象深い (2020年2月撮影)

## 10. 新たな「重点道の駅 たがみ」(新潟県田上町) 平成27年度選定

平成27年度に開設企画段階で「重点道の駅」に選定されている。「重点道の駅」は企画段階から対象となるので、開設前に申請をして認められた形である。「道の駅 たがみ」は①産業振興、②地域福祉、③交流・連携の三点を軸として地域の交流の拠点となることを明確に打ち出した。しかし、「重点道の駅」に選定されたが、計画や公共交通に関連する諸般の事情で、水面下での調整を余儀なくされてきた。

「道の駅 たがみ」は田上町役場の前に位置し、総合保健福祉センター・福祉施設・商工会館などの各施設が隣接している。国道403号線バイパスが2020年3月に開設したことで、新潟・新津方面からのアクセスが一気に良くなった。

「道の駅 たがみ」のコンセプトは、地元住民に親しまれるようなデザインと特に女性が立ち寄りやすい空間だという。「道の駅」のロゴやシンボルマーク、商品開発などのデザイン監修は、新潟市のクリエイティブ集団「hickory03travelers」が手がけた。施設全体が明るく穏やかなトーンで統一されている印象を受ける。



写真 50 (左上)「道の駅 たがみ」館内売り場と、写真 51 (右上)「道の駅 たがみ」のシンボルマークをあしらった商品。田上を象徴する護摩堂山と生きものをミックスしたという。写真 52 (左下) は同・館内情報案内コーナーと、写真 53 (右下) は専用のおむつ交換室。女性に限らず、男性の利用客も多く見受けられた。(2021年2月撮影)



## 11. 新たな「重点道の駅候補 ながおか花火館」(新潟県 長岡市) 令和元年度選定

長岡市では、「道の駅 越後川口」、「道の駅 良寛の里わしま」、「道の駅 R290 とちお」に次いで4番目となる「道の駅」が、2020年の秋にオープンした「道の駅 ながおか花火館」である。今までなかったのがむしろ不思議なくらいだが、長岡花火を地域の魅力の牽引役として、従来からの地域資源情報の発信・連携をより強化して、広域観光の充実を促進するのが狙いである。開設地の長岡市喜多町は国道8号線や北陸道・関越道のインターチェンジにも近接しているので、交通アクセスの利便性は高いと思われる。例年長岡まつり・長岡花火を実施する頃は、周辺施設も道路も大渋滞で、駐車場の確保や休憩・交流の場を探すのに苦労することが多い。

残念ながら2020年は新型コロナウイルス感染症拡大のため、長岡まつりでさえ中止を余儀なくされた。「道の駅 ながおか花火館」が、今後の長岡まつり・長岡花火で、どれだけ人が集中するか予測しがたいが、通年営業の施設として長岡市の観光のランドマークとなり、人々の交流を広げる施設になることが期待されている。

『国道や高速道路からの好立地を生かし、情報発信のゲートウェイ形成や高速道路の休憩施設を補完』というのが設立趣旨だが、文字通り長岡花火の魅力之余すところなく発信する地域の拠点としての発展が望まれる。



写真54(左)・写真55(右)のいずれも「道の駅 ながおか花火館」館内の展示。花火にまつわるものだけでなく、長岡のブランドを強く意識した内容が目についた。今後ますます多くの利用客の来訪が期待される。(2021年2月撮影)

他にも、開駅を検討中の「道の駅」は「(仮)五泉」(五泉市・2021年秋予定)、「(仮)弥彦村おもてなし広場」(弥彦村・時期未定)がある。「道の駅 米山」(柏崎市)はまだ各所に案内等が残っているが、事実上数年前から休止状態である。

## 12. 新潟県内の「道の駅」で見た特産品と地域地産ブランド化の事例

「ここにしかないもの」や「ここでしか買えないもの」は、地域のブランド化を図る上で重要なアイテムとなり得る。新潟県で最も有名な地域ブランドはおそらく「魚沼コシヒカリ」だろう。こ

の名前を冠しただけで米の価格が一気に上がる。

しかしながら、一口に地域ブランド・地産ブランドと言っても、ある程度人口に膾炙するのは時間もかかるし、そのための広報・広告などの投資もそれなりに要る。広告の手段で最も安上がりなのは口コミだが、SNSのインフルエンサーからもわかるように発信する側の信憑性と信頼性がないとそう簡単に拡散するものではない。SNSは諸刃の剣で、一気に拡散する威力はあるが、ネガティブな情報ほど広がりやすい傾向もある。もちろん外向けの情報発信はやらないよりはやった方がいいが、伝え方や伝わり方まで考えておかないと、期待していたほどの効果は得にくい。

それぞれの「道の駅」のコア・コンピタンスとして大いに人を魅せる誘因があるならば、浸透の度合いはともかくとしても、地域のブランドとして機能していると考えても良いだろう。2012年に筆者が行った「村上茶」の調査でも大いに実感した。

ところが、新潟県内の「道の駅」に実際行って気づいたことがある。風景などの「ここにしかないもの」はともかく、「ここでしか買えないもの」は意外と少ない。各施設の飲料の自動販売機は、ダイドードリンコその他の大手メーカーが参入している。多少のばらつきはあっても、大抵は同じような品揃えである。「道の駅」の名物ともいえる地場産の新鮮な野菜・果物は魅力的だが、大手スーパーや一部のコンビニエンスストアでも取り扱いしているし、地産地消を銘打った店舗は至るところに見受けられる。今や競合相手が多くなりすぎて、それだけでは決定打に欠ける。営業時間が短い「道の駅」での地場産農作物の販売は、利便性ではやや不利である。

JR 駅の売店や高速道路のサービスエリアなどでよく目にする、価格として1,000円～1,500円程度の「広く浅く土産用のお菓子」は大抵の「道の駅」で見かけた。各所で置いてあったということは相応に需要があるからだが、地域地産のブランドというよりは汎用性の高い商品という位置づけだろう。



写真56 (左)「道の駅 新潟ふるさと村」にあった「バスセンターのカレーせんべい」、写真57 (右)「道の駅 クロステン」館内売り場にて。(2020年2月撮影)

工芸品や一部の酒類・健康食品、肉類・海産物を加工した商品を除けば、新潟県の「道の駅」で扱う商品の大半は、富裕層や価格が高くても購入する利用者を狙ったものではない印象である。その場で飲食できる商品も、ご当地グルメと称されるものや、軽食・スナック類が目についた。生鮮食品はともかく、茶などの日持ちする加工食品に着目すれば、それぞれの地域特性が浮かび上がってくるかと期待していたが、むしろ流通ルートや販路の拡大といった営業努力によるものと思われた。

例えば「村上茶」などは、村上市内にあるいくつかの老舗が販売している商品を各地で散見した。茶葉は仏事の返礼品とされることも多いが、最近では「村上茶」の茶葉を菓子等に使った商品も増えてきている。このような日持ちする加工食品になると、生産地に止まらずあらゆる地域への広がりを見せる。先述した「広く浅く土産用のお菓子」にしても、「村上茶」や「越後姫」といった



地域ブランドとつなげることで、土産物としての地域特性を強調する狙いがあると推察する。茶葉そのものだけに注目するならば、下越・県央の「道の駅」では見かけていた「村上茶」も中越・上越の辺りに来るとほとんど見かけなかった。上越の辺りでは「雪蓮茶」が浸透していた。それ以外の地域で代わりによく見かけたのは、その地域にある店舗の商品（必ずしもその地域の産物でなくてもいい）もしくは地元の人たちが採った薬草などをパッケージ化した健康茶などであった。



写真 58 (左)「道の駅 ちぢみの里おじや」で見かけた雪室紅茶などの商品、写真 59 (右)「道の駅 加治川」で販売していた野草茶。乾燥させた野草をそのままパッケージという商品は県内各所で見受けられる。(2020年2月撮影)

例えば「ハローキティー」に代表される全国的に有名なキャラクターや、各地域のゆるキャラをあしらった商品はどこへ行っても見かけるが、キャラクターの魅力と商品の魅力とが必ずしもマッチングしているとは限らない。ゆるキャラによる地域ブランドのランドマーク化は既に過飽和の状態であり、一定の浸透と地域ブランド化を果たしていると思われる「レルヒさん」(新潟県)、「あぶらげんしん」(長岡市栃尾)、「やらにゃん」(胎内市)といった成功例を除けば、キャラクターだけで本当に販売促進ができるかは懐疑的である。「道の駅 ゆのたに」で販売するレギュラー珈琲のように、地域の景色を商品に印刷して販売している事例もある。

地域ブランドとして最近とみに台頭してきているのは「雪室珈琲」「雪室紅茶」などの越後雪室屋による「雪室シリーズ」である。これは越後雪室屋が運営する組合に各種のメーカーが入会して、「雪室」の銘柄に見合った品質とみなされたものが、「雪室」のブランドを標榜できるシステムである。入会や商品化には厳しい審査が行われ、味もさることながら商品におけるコンセプト(物語性)や顧客のニーズを満たしたものだけが選ばれる。このような異業種連携のシステムは高く評価され、「にいがたIDS コンペティションシステム部門審査員特別賞」、「経済産業省がんばる中小企業300選」、「中小企業団体中央会 先進組合事例」にも選定された。「雪室シリーズ」の商品は、「道の駅」でもよく見受けられた。「道の駅 にいがたふるさと村」のアピール館では、カフェ「雪室コーヒー GATARIBA」で「雪室珈琲」その他の飲料を提供している。「道の駅」でレストランを備えた施設はそれなりにあるが、カフェスタイルでくつろげる空間は、さほど多くない。



写真 60 (左)「道の駅 R290 とちお」正面出入口と、写真 61 (右) 名物「栃尾のあぶらげ」販売の屋台。「栃尾のあぶらげ」は館内でも販売中。(2020年2月撮影)

「道の駅 みかわ」では国産大豆と名水「薬師清水」を使った豆腐・おから等の加工食品が名物となっているが、同様の商品は各地に存在しており、「ここでしか味わえない」独自性には欠けるきらいがある。さすがに全国区で通用する「栃尾のあぶらげ」くらいだと話は違うし、「道の駅 R290 とちお」には「栃尾のあぶらげ」専門の屋台があって人気を博している。

新潟県内の「道の駅」における飲食のスタイルは、高速道路のサービスエリア等でよく見られる軽食の提供や大衆食堂風のスタイルが主流である。もちろん中には「道の駅 パティオにいがた」の本格的なビュッフェタイプのレストランや「道の駅 庭園の郷 保内」のイタリアンレストラン、「道の駅 漢学の里しただ」の農家レストランなどユニークな事例も散見する。「道の駅 新潟ふるさと村」や「道の駅 あらい」など規模の大きい「道の駅」では、多種多様な飲食店が軒を連ねるケースもあるが、一般的に「道の駅」自体の営業時間が短い場合が多い。車で移動途中に立ち寄っての飲食となることを考えると、調理の手間や待ち時間がかからないものが重宝されるのも当然と言える。地場食材を使った料理と銘打って提供されるメニューも多いが、「ここでしか味わえない」ものが果たしてどれだけあるだろう。土産品用にパッケージ化された商品の方がむしろニーズはありそうだ。特に、2020年度は新型コロナウイルス感染拡大のため、飲食業が大打撃を受けた。

例えば「道の駅 加治川」では地元特産の加治川豚を使ったカツ丼・ラーメン等のメニューが食堂で提供されているが、「道の駅 加治川」のオリジナル性が高いのは土産品として販売されている「加治川マカロン」である。一部の施設を除いてはその場で消費される飲食コーナーのメニューよりも、気軽に購入できる土産品の方が重宝されている。

その「道の駅」へ行かないと食べられない(入手できない)もので、「道の駅 わしま」の「だんご汁」や、「道の駅 胎内」の「たるが橋カレー」など、定番となっている食事のメニューについては、好みも多様なので一律に比較するのは難しい。さすがに新潟県だけあって、使用している米の味わいを強調する定食が人気だが、どこも似たような感じになってしまうのは否めない。ラーメン・蕎麦等の麺類についても同様である。比較的名前が知れ渡っている柏崎市の「鯛茶漬け」は、柏崎市の加盟店で提供されているが、価格や内容もそれぞれの店舗で差異があり、必ずしも同一のものではない。どちらかと言えば、先述した「雪室」シリーズに近い印象を受ける。糸魚川市の「ブラック焼きそば」も「鯛茶漬け」と似た様相を呈する。

アイスクリーム・ソフトクリームは気軽に味わえて値段も手頃なので、「道の駅」で人気メニューとなっている。例えば、「道の駅 笹川流れ」の「日本海ソフトクリーム」、「道の駅 良寛の里 わし」の「ガンジーソフト」、「道の駅 国上」の「そば粉アイスクリーム」などが挙げられる。

「道の駅」に限らず、地場産の食材を利用した加工食品や生鮮食品を取り扱う店舗はここ数年で急激に増えつつある。それらの店舗がことごとく繁盛しているわけではないだろうが、三条市の「ただいまーと」は盛況な事例と言えそうだ。うまくいっていると思われる店舗に共通するのは、地場産品とそれ以外の日用品のバランスの妙である。地元以外の地域から流通してきた少し目新しい商品や、スーパーで売られているよりも手の込んだ、地元の食材を活用した加工品などが揃っている。

新潟市の古町や本町が代表的な例となるが、小売店が形成する商店街が廃れつつある一方で、大型スーパーや飲食店・ファッション等のチェーン店を中心とするショッピングモールの形成も各地で進んでいる。先述したが、「道の駅 ゆのたに」の対面にはウオロクがあり、半径1キロ圏内には原信を中心とした店舗が建ち並び、生活に必要な品物の大半はそこへ行けば十分賅える。以前は賑わっていた「道の駅 ゆのたに」の生鮮食品売り場や特産品売り場は閑散とし、レストランは営業を止めた。このように「道の駅」を取り巻く環境の急激な変化に伴い、従来あったものが立ちゆかなくなるケースが今後も多かれ少なかれ出てくるだろう。

「ここにしかないもの」や「ここでしか買えないもの」は、「道の駅」の地域ブランドには必須だろうが、地場産に拘りすぎず、「どこに行ってもそれなりに手に入るもの」や、ある程度の定着した品揃えを強化するというのも、これからの利用者のニーズに合うのかも知れない。



写真 62 (左上) は「道の駅 胎内」出入り口、写真 63 (右上)・写真 64 (左下)・写真 65 (右下) は同館内の展示の様子。胎内市公式マスコット「やらにゃん」や、胎内市出身のアイドルの写真の展示などが目を引く。(2020年2月撮影)



今回新潟県内の「道の駅」を巡った中で大変興味深く感じ入ったのが、胎内市の「道の駅 胎内」であった。上に示した写真のように、館内はご当地マスコットや地元出身の声優アイドルの展示に満ちあふれていた。これもまた「ここでしかない」ものである。アイドルの写真やグッズは、どうやらファンが自主的に持ち込んだというが、それを受容する「道の駅」側の懐の深さを感じられる。

胎内市ではかねてより米粉を用いた商品開発やレシピの紹介なども積極的に行ってきたが、商品開発だけでなく、公式マスコットの「やらにゃん」をシンボルにした地域活性化に取り組んできた。「やらにゃん」が他の地域のゆるキャラなどに比べ秀逸なのは、「やらにゃん」を軸とするファミリーを形成しているからである。やらにゃんファミリーの詳細は現地に行って見て欲しいが、ファミリー単位としてのマスコットは誰でもどこかに共感しうる余地がある。この間口の広さは「道の駅 胎内」の魅力にも通じる。

### 13. おわりに～道路は続くよ、どこまでも…これからの「道の駅」の継続を願って

2020年04月22日、この日が何の日か？と言われて何か思い当たる人はどれほどいるだろうか。「道の駅」の日である。一般社団法人日本記念日協会（代表理事：加藤清志氏）が2020年01月31日に正式登録をしてから最初の記念日が冒頭の日付である。新潟県だけでなく、各地で年々増加し、それぞれが独自に進化を遂げてゆく「道の駅」にとって、2020年は記念すべき節目の年だった。さらに、2020年04月01日からは、また新たな北陸「道の駅」スタンプラリーが始まった。

ところが、2020年は新型コロナウイルス感染症の拡大で波乱の幕開けとなった。この報告書を一旦脱稿した2020年03月には、社会的な影響は日ごとに深刻になる一方であった。図らずもコロナウイルス禍が浸透しつつあった2月中旬から下旬にかけての時期に新潟県内の「道の駅」を巡ることになってしまったが、どの「道の駅」へ行ってもコロナウイルス感染防止の呼びかけが掲示してあった。感染防止の注意喚起の対応はいずれも迅速だったと思う。3月に入ると、臨時休館や営業時間や規模の縮小を余儀なくされた施設もいくつか出てきた。この動きはさらに加速し、4月の緊急事態宣言、本来かき入れ時であるゴールデンウィークの臨時休業に続く。

新潟県内における新型コロナウイルス感染者の増加・範囲の拡大は連日状況が刻々と移り変わり、社会や経済に大打撃を与えている。それは2021年3月現在も進行中である。いずれにせよ大半の「道の駅」で2020年2月以降に予定されていたイベント開催が中止・延期され、営業時間短縮も多く施設で行われている。世界的にも未曾有の危機的状況がいつまで続くのか、現段階では皆目見当もつかない。三密（密接・密集・密閉）禁止が提唱され、日常生活を送る上で最小限の活動以外は自粛しようという風潮の中で、当面の間は展示を除いて「道の駅」で大規模集客が見込まれるイベントは行われまいだろう。春から夏にかけての週末・連休で、本来ならば「道の駅」が大いに盛り上がる時期であっても、2020年はやや閑散とした状況になってしまったのは極めて残念である。

しかし、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るう中であっても、人々の生活や移動を支える「道の駅」は地域の拠点として今後も機能してゆくだろう。道路はあらゆる社会活動の土台だ。人口が減り、地域の生活基盤をなるべくコンパクトにしようという流れの中で、これからの「道の駅」に期待される役割はますます大きくなるはずだ。それぞれの施設の規模や特性に合わせた、地域の住民や訪問する人たちのニーズになるべく即した活動を続けてゆくことが、これからの「道の駅」のひとつのありかたである。

冒頭にも述べたように、「道の駅」の運営の難しさは、利用者のターゲティングが絞りきれない点ではあるが、逆に言えば最低限の設備・サービスさえ維持ができれば続けてゆけるという強みとも取れる。不特定多数の利用者向けの設備・サービスとして求められるものはシンプルで、そもそ

も「道の駅」の要件とされている『無料で24時間利用できる①十分な容量を持った駐車場、②清潔なトイレ（原則、洋式）、③子育て応援施設（ベビーコーナー等）』に他ならない。

この調査活動の際に立ち寄った某「道の駅」では（折しもトイレットペーパーの品薄が報じられたこともあってか）複数の個室トイレが酷く汚されたままになっていただけでなく、トイレットペーパーが根こそぎなくなっていた。これは極端な例かも知れないが、そして誰か心ない者の悪戯であったとしても、このような施設にあまり立ち寄りたくないと思うのが人情である。

心理学には「ブローケン・ウインドウ理論」というものがあるが、割れた窓を放置していると他の窓も割られやすくなる。ゴミだらけのところにはゴミが捨てられやすくなるし、きれいに維持されている場所を汚すのは一般には気が引けるものだ。施設の老朽化は仕方ないにしても、トイレを中心に今ある施設をなるべくきれいに保つことが「道の駅」のこれからにつながる。振り返ってみると、今回の調査で活気を感じられる「道の駅」の大抵は掃除が行き届いていた。施設や地域の特性は異なっても、「道の駅」が存続することを最優先とするなら、無理のない範囲でメンテナンスに気を配るのは道理である。

人口がどんどん減ってゆく。新たな道路の開設で従来からの交通の流れが変わり、時間の経過とともに施設も老朽化する。コンテンツの陳腐化もあるだろう。「道の駅」を取り巻く環境は、必ずしも明るいものではないかも知れない。

未来に向かって続けてゆくためにも、今あるものを活かした取り組みを進めるだけでなく、それぞれの施設の強みに気づいて欲しい。強みは案外自分ではわからないものだし、思い込みで見当づけるよりも周囲に聞いてみる方が適切なことも多い。「道の駅」を訪れた利用者との会話や問いかけの中にヒントがある可能性は高い。道を尋ねられやすい人はおおむね親切である。親切で安全で清潔な「道の駅」ならまた来たいと思う。これからの新潟県の各「道の駅」がどのような軌跡を辿るのか、地域の牽引役としてどんな発展・進歩を遂げるのか。今後も是非見守ってゆきたい。

この文章は、2019年度の地域施行研究の報告書である。調査の折に、また報告をまとめる際にお世話になった皆様に心から感謝したい。

「道の駅 庭園の郷 保内」の加藤はと子さま、近藤 瞳さま

「道の駅 いりひろせ」の佐藤 貞さま

「道の駅 胎内」の『やらにゃんパパ：やるぞう』須貝勝男さま

「道の駅 瀬替えの郷せんだ」の長谷川 東さま

「道の駅 南魚沼雪あかり」の関佳央里さま

ダイドードリンコ株式会社の堀内良宏さま、田中敏幸さま

上記の方々には、特にお世話になりました。どうも有難うございました。 (了)

#### 【参考資料】

- ・道の駅 公式ホームページ
- ・新潟県 公式ホームページ
- ・新潟県警察 公式ホームページ
- ・まちの駅 公式ホームページ
- ・国土交通省 公式ホームページ
- ・観光庁 公式ホームページ
- ・道の駅旅案内全国地図2019年度版（ゼンリン）
- ・道の駅旅案内全国地図平成30年度版（ゼンリン）
- ・道の駅旅案内全国地図平成29年度版（ゼンリン）
- ・道の駅旅案内全国地図平成28年度版（ゼンリン）
- ・道の駅旅案内全国地図平成27年度版（ゼンリン）
- ・道の駅旅案内全国地図平成26年度版（ゼンリン）

- ・道の駅旅案内全国地図平成25年度版(ゼンリン)
- ・道の駅旅案内全国地図平成24年度版(ゼンリン)
- ・全国版道の駅ナビ2020(交タイムス社)
- ・国土交通白書2017(国土交通省編)
- ・国土交通白書2018(国土交通省編)
- ・国土交通白書2019(国土交通省編)
- ・レジャー白書2017余暇の現状と産業・市場の動向(公益財団法人日本生産性本部)
- ・レジャー白書2018余暇の現状と産業・市場の動向(公益財団法人日本生産性本部)
- ・レジャー白書2019余暇の現状と産業・市場の動向(公益財団法人日本生産性本部)
- ・北陸「道の駅」スタンプラリー&クーポンラリースタンプブック2020-2022年版(北陸「道の駅」連絡会事務局)
- ・北陸「道の駅」スタンプラリー&クーポンラリースタンプブック2018-2020年版(北陸「道の駅」連絡会事務局)
- ・北陸「道の駅」スタンプラリー&クーポンラリースタンプブック2016-2018年版(北陸「道の駅」連絡会事務局)
- ・関東「道の駅」スタンプブック2020年版(関東「道の駅」連絡会)
- ・戦略的6次産業と「道の駅」(山本久義著、泉文堂)
- ・海洋高校生たちのまちおこし(渡邊憲一著、成山堂書店)
- ・新潟の逆襲 ピンチをチャンスに変えるリアルな提案(田村 秀著、言視舎)
- ・町屋と人形さまの町おこし 地域活性化成功の秘訣(吉川美貴著、学芸出版社)
- ・まちづくりの非常識な教科書 35万円で10億円の経済効果を生んだメソッド(吉川美貴著、主婦の友社)
- ・これでいいのか新潟県(岡島慎二他著、マイクロマガジン社)
- ・これでいいのか新潟県(岡島慎二他著、マイクロマガジン社文庫)
- ・はじめて学ぶ人のための経営学入門2(片岡信之他著、文真堂ブックス)
- ・大学4年間のマーケティング見るだけノート(平野敦士カール監修、宝島社)
- ・販売力営業力を伸ばす20のヒント~お客様との幸せな関係づくり(今井進太郎著、グローバルマーケティング株式会社)
- ・消滅してたまるか! -品格ある革新的持続へ- (地域ルネッサンス創造機構シンクタンク・ザ・リバーバンク、文藝春秋企画出版部、文藝春秋)
- ・ビジネスを変える100のブルーオーシャン(日経BP1総研、日経BP)
- ・平成29年度版 新潟県100の指標(新潟県総務管理部統計課、新潟県統計協会)
- ・平成30年度版 新潟県100の指標(新潟県総務管理部統計課、新潟県統計協会)
- ・令和元年度版 新潟県100の指標(新潟県総務管理部統計課、新潟県統計協会)
- ・聖地巡礼(岡本亮輔著、中公新書)
- ・アニメが地方を救う!?(酒井 亨著、ワニブックスワニプラス新書)
- ・地域再生の失敗学(飯田泰之他著、光文社新書)
- ・人口減が地方を強くする(藤波匠著、日経プレミアシリーズ新書)
- ・農村漁村地域で働き生きるための経営学入門(齋藤毅憲他編著、文真堂)
- ・ソーシャルデザイン実践ガイド(笥裕介著、英治出版)

上記資料以外にも「道の駅」が独自に発行しているリーフレットも参考にした。